宇都宮物語

塔姫の院　二

正本國儀下巻

古本五の巻

今板本十三の巻ノ二

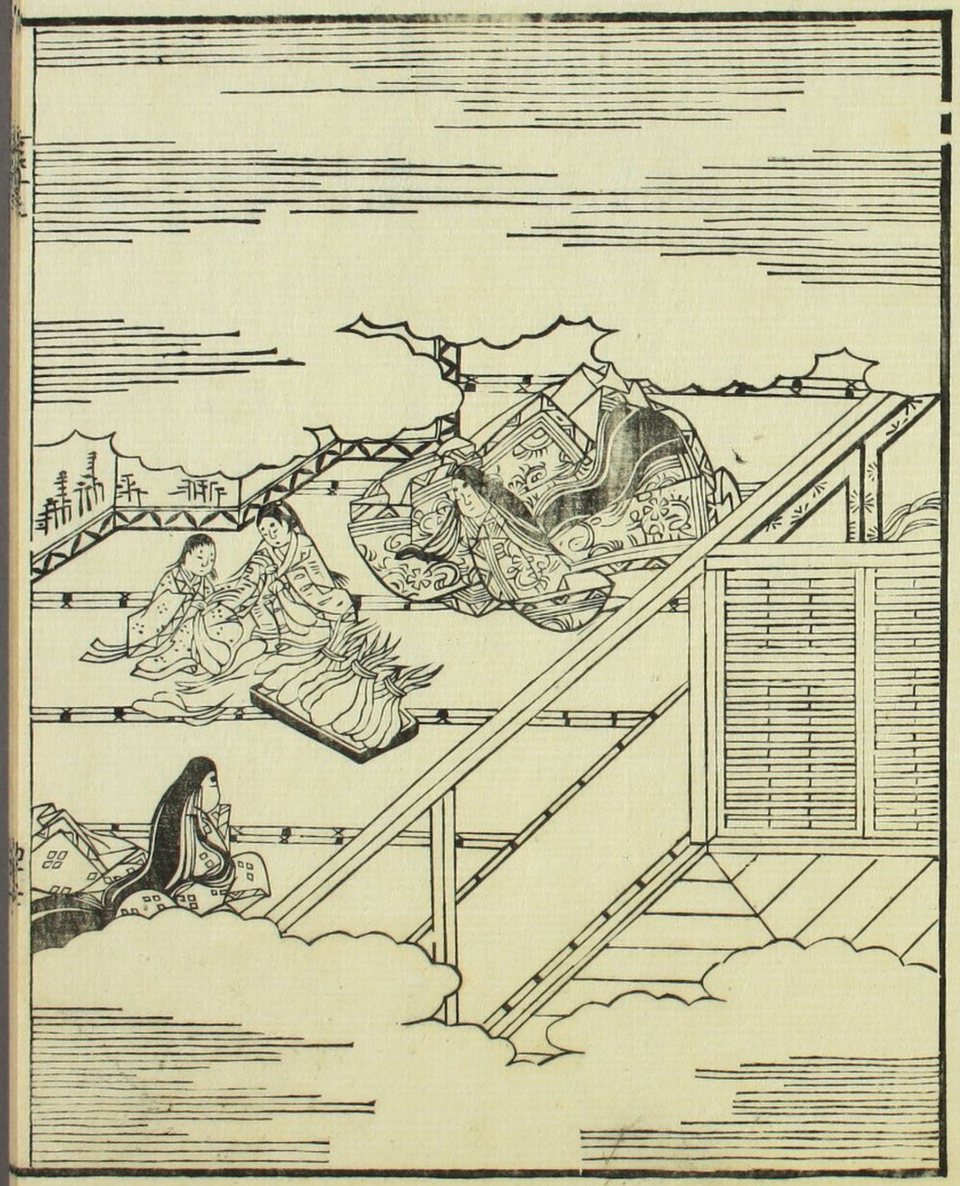
田辺氏藏書

風をかしきゆそしく、中納言の君
君をのみこそ見て、いつ海ハ秋山も紅葉をかく
姫よけるかな、右大臣(うだいじん)むかしのさうえいなりしかりを
をうさゆりひく
七夕のわかれ夜そわ君も君をうしと君も公に
めつらしきかれ、つらし
かれりなくうつらし身をこれをそてぬ山まで君
かしひとうしろ、中将
君ゆえにすしとなをなしかくしうれしきこ
へもかりかるかな、むまのとけ
君よりしく家に袖にかくこ女ゆ君ゆきみち

と里人ゆえんどさうゆ
いかしへハ君かうろをふみしいろ此いまをやま
へふちりまゝふるとて中将ハひを山こゝりしやうれ
ことこんれかえさん、ちりまさまさんどれかをよこふえ、
右大将の所とうるぬいとのくうみさうれ家え、まさ
それちか中にあらはれ少く物とふきありせて、と
ゆひとくはしやうしうさうたひ夜一よ河そひ給
所にはうやまいと給うまゝ給ふれ山のめくる
の山ふしよたよ河をちうみまいゆを山れとくお
うして、ゆかいなるうるへそしくるをてことれかれ
そうゆれよさせよろ川のくさ物くひつ、へくれ川

をまいりくをしたん。山こりり
かつらの川いまはたひのくるしさにこもせらそ
らいまなるあれを。大将
さてにかくあるとらされかりしさりしそそれみ
をあもぬるゝやかせし中納言
人らは我そかつらの中なりしいまもまへねとえ
やはいくけり。辨殿
よ我くらめかりしかりし秋分さに浩したひの
かにかつらつく中将
月まさらひのをとりはあらなからかぬ地は袖
ゆそまさかるなとの給つてあそひあし給かくて日やうく

これりてゆくかとに。うねまの川山こゝりのこまさにかゝ
のまさにかせ。いとさうにてうしてむさとこと物
せそ。かしいむまは大つりかりせく。ぬれてあをまさ
あつくいまく。いとぬかりさせなかひ川ともよいぬい
まさせさをそにいれてりさせてまうて。山ふしとをめし
あのめく。いねさけくかせかしのあ我をとつくとくすえ
ねりさせ給へましまひつこそ里の川山こゝりにこそ
ゆつりさかふま。あの川はせうにたんのあしは毎てを
まうをあうこみしてあつくのそらうなまつらしかひ
さしてうしうのあなとよろ川のてうつくしいまを
ちうこそあの川はいかりかくて一。うさりなくさよう



いかてりさやうるうさ夜ゆくぢううゐよいかくとこ
そ松風ハそれとのミなん
　　あらりぬうよさむしといさやうあとうすミ志と
とく山の嵐（あらし）をそしふこれりも君しうれの給つり御う
にとりさくたてさつり給へぞぬまゝ給みしいとか
ありりゆやにをり給わをら孔君のもとにこよのてな
里給ふぞうらもみなうまりてひさちくしてむし
里なとん

女きみむりしをいまも、これふきあ毎れこの御ゆへり
とこそ極さうにこれとのこまふぞくハ に文四郷殿
りくて三条の院りハ四面めつりさらしむまつる後
と、おさくみしも、後づかの御うたに一もなし、大将よい
と御かりり、東中将の御うたにあまたあり、御かとのよ
いえ法とまつりんくきみたちの御車とも右大弁
のとのくのかたに或ハ此ふ毎ふかけされハこれあらひし
きんとて大かくの御をこの車あまたた所とくいとり
こしぞに御りくおりれ人よゆうされるとかくしなりし
かハいまもみかとの御心よ御ふきいれさまつれハづゑよ
御前よさふらひくいとくきううもうことも、いとゆく

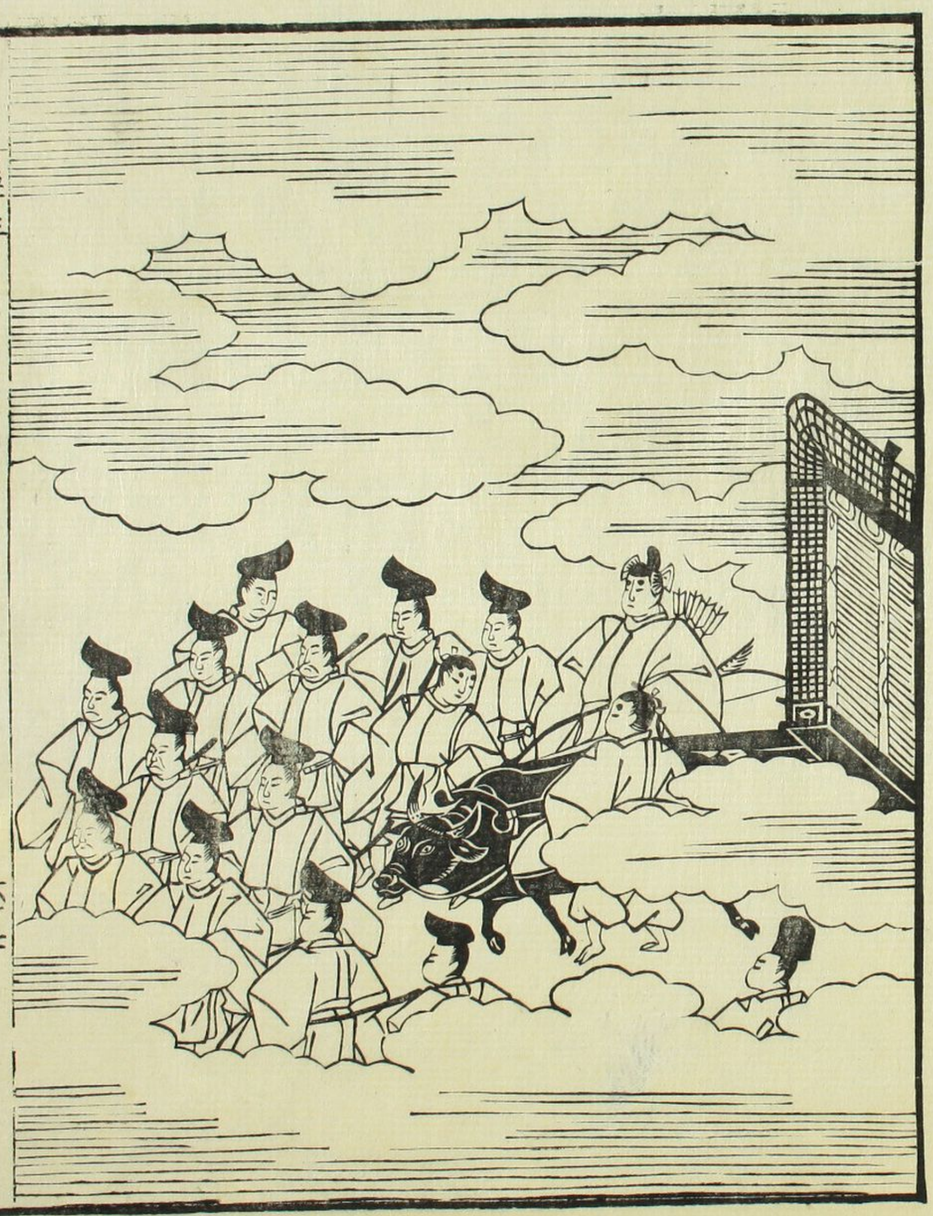
きこしめせ、かたちもことものの抱しぞこれうたにきこ
ゆりやう、むりしうち、の院よつりそれをさうふくうへ
よい所かくふきのこゆりかりハぎつくてぞりハ御うち
とあ所めてりくきんとし侍しとれよ、ふらつゑにあ
をしろくなのりしをもふまなく侍し、いまかうれ
ゆやきにつうまつりかうの御中にさふらへと、りの
抱りしうまひしうあんそれハうこそまつりかう
きりぬやふを毎いめんし給いを世にハんゆをゆりぬ
やうにて原給へいりくきく侍りいるむるれつてるれ
人よつき給つりとて、ゆやとううしきてそまつりるん、
到りこそうやうなりれとくハ御前さうをめしつりひ給

ひてさつくひ給て、なくくさまく給へは我をん
なとなりかるなりにこれはむまきしよりらうとけなり
しかは、おろよりといふたりにはなりしそくいかくこれを
これに人なるしにとなりひしよ、ある時えとのめんはなりと
とし紀時もありある時えいとなりしき時をきこしは
な我はいてなりひても言ふしはこれにまりて人のうら
みををいつくはなるとうふと人もきてしひく言つる
いはいてしそ言ふは、やまうらはうらやまれ、いえまし人
のうくひとしくはなはらをこむとみくは世にをましらふ
無紀との給かとに、あまとに妹ぬといふ君たちはよろ所
りこまして給とも、まへて我これ事さうし人もいふな

とのうまひて、その日ほとめくぬりて先にさしあを
里給、大夫我をなをしまかく給め我ある無紀とて、そ
ろともにへ給ぬ事はさんたちは左右のとうらになるを
えさしてなるまとひまふまう給りなし、その日なる
つくまつり給へとて活つひき、かくなんと給てゆまと、
喜もし給りはへまつり給かぬよしとまさせ給へは大きな
殿とめまて、それをまつり給ふ孫はたちうつりめ勢はい
まかくはかりになりにて事は我をなと人はしふへさに
あらはと知りてまつり給ふ人のお物のさしをさへりん
のまけれさみな我まつりて物のきしきもあるいせよ、お
とはまつり給へとをつるうさりひきとてまつらせ給へは

さぬりしけるこそ、心うき事也。天下にしらせまふと
も、こゝろこそにぬりつゝ御ちら給ハ事なんやうしぬや
さけくさまふとも義とぬ得さハ月ちろうくまひさせ
給ハなりしやハそこ給ぬろうよしふ人にくゝ人の給り
のこまふ屋うよ。志てましりハ殺やうなる人にしもなく
くてことに多とをいうにし給ハ給ハ紀人をあとも
ぬのうんさし此屋うなる人ハえしを知りしや。さこれ
うこさ給てきりと。ぬりして。おしやうとちしめよ
ぬさこし給。文の御ふこしくまつりし時ハかきりを
なん思ひしそ此御ふこをなん給を給ハなりにしかハ
つゝ紀よなんとさこし給。ぬとくハそれをきふさき

き給きれハ。ぬりしなん。いかくかさぬりそしに思ひ
ゑ。ちにまやとて。どりいてくしそゆつり給。かくて
あるしより。ぬりん中いとめくこし。ぬりとのくさ
此ゑ。御ぬりしなり給さしろ。さんなちあそひあ
ぬさ給女さこ此ゑしかつしきちろ。いとぬしをよ
ゑ。ゑなあそひし給。こゝち三十人ちろ。ちしハ
あまゝ此をむよ人此しそゆつりゝなかいとぬりり
ぬ。さ此て此大納言宰相いまをりり宰相中将藤
人のかねなとぬりゝなし給。かくてさる後りしゑ
ぬとくもそうこ給と。ぬりしてをさく院ぬり給ゑ。
ちしめゆつりまつり。ちろに大きさへのゑこまして給。いり

とうれ志ふをあるうれ。の給ひせんまゝにと申しふ給
ぬなこそ。心なくぬやうふもとおこしまつり。み給
く所也と給ひ。文の所まへあしこやうにいひさ
りくなりしうへいとくむしの人れ掛し給ひぬをなん
衰(おとれ)よ心ゆそくおひ給し。いまを云ゆるひなく申そ
ろしきこまるれハ。所文つゐなとし給くうしろこき
あし給ひ。其のとしうなん。民部卿殿よきこゆる
まゐしやき給きんな紙申りしうへいよをうし
ろめたうけときあし給。こ給ひ民部卿殿の掛し給
よ。かるなれまゐる物ときあし給へハそよさるなる
きり。ひめきこの所とそやむりましき人へきくまゝ

つゝまりしなとゝとくきくハ所ゝく。志のひてつかひ
よ掛し給やうふくぎいくせくこくまつり給へとゝき
あしよとなん。女所ふなり給しよろしひようこに掛
きる人のまゝそくさりきるふの給きる中に。中納言
らるしやされくのやむまゐなく人とこれもあるもの
とゝし給ハさなる掛紙これハ何(なに)れまゐる所なん。
ゆやの人なみくまそいてきるにてそ。女ハひとくもこ西
めれがるいろ人のことハなかくせん。民部卿それハ
さしをあしうれ女御の所ふよいまゝ申ふ給
ひ。いと衰まそ申かさん。さきくの人ハあまとこれ
中とものあしきれた。女御もふとき所掛し給な